

## 今日の説教のポイント<詩編 39 編 2~14 節>

ただ人生の空しさだけを語っているかに見える「コヘレトの言葉」の著述者についてルターはこう言っています。「彼は（全く暗い悲しい）灰色のベールをかぶっているのではなく、（明るい喜びの）赤いベールをかぶっている。このことに私たちは気づかねばならない。」詩編の中で最も暗い詩と言われることもあるこの詩にも同じことが言えます。この詩全体をたどってそのことを確認していきましょう。

### ①詩人の暗さ—危機的状況、つぶやきの我慢、人生のはかなさの吐露

詩人は重大な危機に直面しています。詩の中の幾つかの言葉から、彼は死の近さを実感するほど重く病んでいたのだろうと考える学者たちも少なくありません。その危機を、彼は神による懲らしめ、報いと受けとめます（11, 14, 5）。ですから彼は、苦しみの中にあってその不幸を嘆き訴えることをせず、口をつぐんでおこうとします。悲嘆の言葉が神への不信と反逆の罪を重ねることになるのではないかと恐れ、また同時に不信仰者の嘲笑と増長に資することを危惧したからです（2）。しかし沈黙すればするほど苦悶の情は心の中に燃え盛り、思わず知らず語り始めるのです（3-4）。彼が沈黙の中に苦しみの人生を熟考して神に問いかけ訴えたのは、その短さ、はかなさ、空しさをどう受けとめ解いたらいいのかということでした（1-7）。人生の暫時性（ひと時のものであること）を語るその語彙、表現の豊富で多様なこと—それゆえにまた、この詩は暗さ一色のように思われるのです。

### ②詩人の明るさ—永遠の实在である神への渴仰、待望

人生は過ぎ去って行くさびしい悲しいもの、万物は流転し霧散して行くはかないものというくらいのことなら、わざわざ聖書に聞くまでもありません。ギリシアの思想にも漢詩にも日本の感性・情緒にも無常感は共通します。私たちがこの詩の中にしっかりと注目し、聴き留めねばならないのは、詩人が、すべてははかなく過ぎ去る中に、ただ一つ永遠で真実で絶対なもの（お方）の存在を確認し、それを指し示し、それを待ち望んでいるということです。「主よ、それなら、何に望みをかけたらよいのでしょうか。わたしはあなたを待ち望みます」（8）。ここにこの詩人の明るさが見てとれます。確かに、旧約の中のこの詩人は未だ永遠者となる神の到来を知らず、待望する彼の明るさは「薄明」とでも言うものです。しかしその待望が成就した新約の中にいる私たちは、まったく明るさの中に置かれているのです。「神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」（ヨハネによる福音書 3 章 16 節）。（桑原昭）